

# 古民家DIY 改修物語

ビギナーでも  
できる!

常に水気のある浴室は、最も傷みやすいところ。コンクリートで壁が作られていることも多く、解体にも苦勞する。トイレは離れている場合もあるので、新設も考えておこう。



薪ストーブ。暖房能力は確かなものだが、古民家のすき間風のほうがちょっと勝る。



風呂・トイレ小屋を増築中。これが初めてのDIY。ベタ基礎を打ってコンクリートブロックで立ち上がりを作った



完成した浴室。内壁はアスファルトフイーディングで防水し、下はタイル、上は漆喰で仕上げた



和室の畳をとり、床下に潜ってキッチンの配管をする



薪ストーブの煙突を設置するため、天井をはがし、屋根裏にケイカル板を張る



床の傾きを直すため、足固めの下にジャッキを入れて柱を持ち上げ、土台の下にくさびを打つ。このとき心の中で「ちゃんと直すなら、壁はらして家起こししねえといけねえなあ」と思っていたかもしれない



右の植栽の奥に増築した風呂小屋は薪ストーブの煙突が伸びている



After



Before

ふた間続きの8畳の和室のひとつを板張りにしてダイニングキッチンに改装。ふすまをはずすと開放的な空間に。このあと、左側の柱があるところに薪ストーブを設置した



古民家リノベ成功術

水道は直さない。  
水道については、契約前の不動産屋の話で、家の裏の道路に本管が来ているので問題ないはずだった。書類上も設備についてそのように記されている。ところが実際は、水道本管は隣の家までしか来ていなかった。これは大問題で、井戸を掘るにしても、どうにかして水道を引くにしても、数十万円から場合によっては百万円を越える費用がかかる。完全に想定外である。さすがに困ってしまい、あちらこちらで相談したところ、書類の上でもミスが明らかだったので、不動産屋の負担で水道を引いてもらえることになった。排水は下水が整備されていなかったので市の補助金を使って浄化槽を入れた。

トイレと風呂はそのための小屋を増築することにした。実際、これが私にとって初めてのDIYである。在来工法による約30坪の小屋だが、休日しか作業ができなかったため、風呂の完成はそれからさらに8カ月もかかってしまった。その間に家の傾きを直したり、キッチンを作ったりという作業も並行して行なった。

**ジャッキで傾きを直し和室をキッチンに改装**

家の傾きを直すのはプロの大作をお願いした。といっても、床をはがして下がついているところを車に使うジャッキで持ち上げ、土台の下にくさびを打ち込んで支えるという応急処置だ。完全に傾きが直ったわけではない。この作業にひとり来てくれた年配の大工は「ちゃんと直すなら、壁はらして家起こししねえといけねえなあ」と

言ったが、とりあえず、住むのに違和感がなくらいにはなったのでよしとした。

キッチンは2部屋あった和室のひとつを改装する。排水を配管して、シンクが収まる対面式キッチンカウンターを自作した。木で枠と引き出しを作り、天板とシンクはタダでもらった昭和の流し台のキッチンものをはずしてはめ込んだ。それから押入れと付書院を食器棚に変え、床の間に冷蔵庫とガスコンロを取めた。こう書くとも無理やりどうにかしたかのように思えるかもしれないが、このキッチンの出来栄は悪くない。

ここまでやって住めるようになるまでにかかった費用は約60万円。その後2年目の秋に、キッチン一角に薪ストーブを設置し、このちよつと傾いた古民家のリノベーションは一旦終えることとした。

ただ、家は作り続けられるものだ。家族が増え、年を重ねれば生活スタイルも変わっていく。この家はそうやって、80年近い時を経てきた。現代住宅の寿命は30年と言われている。それは、まさに今そのときを迎える昭和の高度経済成長期以降に建てられた家を見ればわかる。新建材は時間とともに劣化していくほかにないからだ。しかも、古民家はそうわらない。そこに人が住まう限り、朽ちていくことはない。むしろ輝きを増していく。築百年を超える数多の古民家が、それを証明しているのではないかと。時を経て人の手が加わること、住み心地のいい家に生まれ変わっていくのだ。

**和田義弥**  
Yoshihiro Wada

改修したDIY家  
田舎で米作り、  
野菜やギョーザ  
も育ててきた  
ライター。著書に『増補改訂版 ニワトリと暮らす』（グラフィック社）など。

そのままで住めな  
家が面白い

今から10年ちよつと前、私は東京郊外の住宅地に暮らしていた。マッチ箱のような小さな借家、猫の類はどの庭に菜園を作った遊んでいたが、ニワトリを飼ったり、薪ストーブを焚いたりして暮らしたいという思いがあった。田舎への移住を自論んでいたのだ。それで、インターネットで物件を探そうとなり、実際にいくつか見て回った。土地の広さや環境など、希望する物件の条件はいくつかあったのだが、そのひとつが古民家だった。理由のひとつでいえば、ここからである。天井を走る迫力ある梁や家を支える大黒柱は見てのだけで惚れ惚れしてしまふ。仕口の造作や金物を使われない木組みによる伝統工法の建築も芸術的だ。木や、土や、竹や、草や、石など自然素材で作られた機能的な現代住宅よりも、風通しがよく、最後は朽ちて土にかえる家が好きだ。

ただ、そのまま住めるようなきれいな古民家を手に入らずとも、それはなかった。そもそも、そういう物件は、必然的に価格も高くなる。私は、そのままでは住めないポロクで安い古民家を探した。自分なりに住み心地のいい家を好きになろう作りたかったのだ。



経験はほとんどなかった。工具も何も持っていなかった。でも、そういうことをやりたかったのだ。

希望に合う物件は簡単には見つからなかった。予算や場所などの条件にマッチしなかったこともあるが、いくらかポロクいいと言っても自分の手に追えないくらいひどい物件ではないし、改修に費用が掛かり過ぎるようでは、物件自体が安くて本末転倒である。

結局、1年以上探して今の古民家に決めた。もちろんそのままで住めない家だった。一番の問題は、水回りがなかったことである。トイレも、風呂も、キッチンもない。水道も、下水もきていない。井戸があったが昔の浅井戸で、とても使える状況ではなかった。

**初めてのDIYで風呂小屋作り**

この家は、昭和初期に建てられたものだ。売主は、すぐ隣にハウスメーカーが建てた家に住んでいるのだが、その後、ここを離れとして使っていたらしい。それで、かつて炊事場と風呂があったと思われる土間には床が張られ、トイレも撤去されていた。屋根の瓦も葺き替えられていた。間取りは8畳の和室が2部屋と普土間だった12畳の板張りの部屋。土間とは別に玄関もあり、縁側も含めて23坪の小さな古民家である。リフォームされたというので、一見するときれいなのだが、先述の通り水回りがないのと、床がひどく傾いていた。ボールを置くとコロコロと勢いよく転がるくらいだ。それを何とかしな